

令和元年6月19日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02263

研究課題名（和文）旧満洲亡命ロシア人の文学的表象に関する比較研究：日本語文学を中心に

研究課題名（英文）A comparative study of representations of Russian emigrants (emigres) in Manchuria provided in Japanese literature

研究代表者

伊賀上 菜穂（IGAUE, Naho）

中央大学・総合政策学部・教授

研究者番号：10346140

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日本人と旧満洲亡命ロシア人との関係をより広い視点から考察するために、日本人作家が描いた旧満洲亡命ロシア人の文学的表象を分析し、日本人の対亡命ロシア人観の特徴とその通時的变化（1920年代から今日まで）を考察した。

具体的には日本語文学におけるロシア人女性、日口の民族間結婚、そして古儀式派教徒とコサックの表象を中心に分析した。その結果、東アジアにおける日口（日ソ）の関係性の変化や満洲国の国策が作品テーマに与えた影響を指摘するとともに、個人的体験の相違が作品のトーンに変化を与えることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では旧満洲亡命ロシア人の文学的表象の全体像の把握を目指し、その成果を国内外で発表することで、旧満洲研究・ディアスポラ研究の発展に寄与することを目指してきた。研究成果の分析と公表は継続中であるが、将来的には複数の研究分野における比較研究を促すことができるだろう。これによって旧満洲地域の民族関係や地域間関係、そして満洲国における文学の位置づけが、より多面的に解析されていくことが期待できる。

研究成果の概要（英文）： This research project aimed to re-examine the relationships between Japanese people and Russian emigrants (e[e-acute]migre[e-acute]s) in Manchuria from a boarder perspective by investigating representations of the latter in Japanese literature and changes in these representations from the 1920s until today.

Mainly focusing on images of Russian women and Japanese-Russian marriages and specific groups such as Old Believers and Cossacks, we identified the significant influence of national and international politics on the themes of these literary works and of the writers' personal experiences on their perspective expressed in these.

研究分野：歴史学

キーワード：亡命ロシア人 旧満洲 文学 移民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

旧満洲亡命ロシア人(いわゆる白系ロシア人)とは、1917年のロシア革命を契機に、いわゆる「満蒙」地域(満洲国領域)に逃亡または滞留することになった旧ロシア帝国住民(非ロシア民族も含む)のことである。その数は一時、数十万人に達したが、満洲国時代には6万人程度に減少していた。しかし東アジア系住民とは大きく異なる彼らの存在は、日本人をはじめとする周辺諸民族の作家の注目をひき、文学作品の中でも繰り返し取り上げられてきた。

1990年代以降、日本の植民地政策と文学との関係への関心が高まる中で、旧満洲地域や満洲国に関わる文学(いわゆる「満洲文学」)にも注目が集まり、その研究も大きく前進した。だが日本人作家や中国人作家による亡命ロシア人像の造形に関する議論は、十分に進んできたとは言えない。その背景には旧満洲研究をめぐる分野間の断絶、すなわち日本研究・中国研究に基礎を置いた「満洲文学」研究と、ロシア研究の一部として進んできた亡命ロシア人研究との学術交流の不十分さがあると考えられる。

研究代表者は十年来、歴史学と民族学・文化人類学の立場から、旧満洲亡命ロシア人の中の農村住民(ロマノフカ村住民、三河(さんが)地方のコサック住民)の実態、および彼らと日本人との関係について調査してきたが、その過程で、ロシア人が登場するフィクション性の高い文学作品が存在することに気付いた。当初はこうした作品を主要な分析対象とは考えていなかったのだが、やがてそれらが「満洲文学」の一部として、その他の諸作品(たとえば中国人やロシア人作家の小説)と深い関係性を持っていることに気づいた。

こうして研究代表者は、文学作品の中に表れる日本人とロシア人との関係の全体像を把握することを目的として、日本語文学および「満洲文学」史全体を視野に入れた包括的な調査を実施するという着想を得た。

### 2. 研究の目的

本研究は満洲亡命ロシア人と周辺のアジア系社会、特に日本人社会との関係性をより広い視点から解明することを目的として、亡命ロシア人研究の立場から日本語文学の中に描かれた満洲亡命ロシア人の表象の特徴を分析したものである。

具体的には、作品に登場する亡命ロシア人の性別、居住地域、階層、民族的特徴に注目することで、日本人作家たちが当時の社会状況や民族政策から受けた影響、およびその結果形成された彼らの世界観の特徴などを明らかにしようとした。

旧満洲地域の諸民族と文学との関係については、言語や地域の制約もあって、対象となる民族や作品の言語別に研究が分断される傾向がある。これは、ロシア・ソ連邦側の満洲亡命ロシア人文学研究と、日本語文学との関係にも当てはまる。今回研究代表者は国内外での学術ネットワークの充実を研究目的の一つとしたが、その中でも特に、日口双方での知識の共有と研究関係の構築を重視した。

### 3. 研究の方法

本研究では日本人作家の作品を通時的に比較することで、対ロシア人認識の変化とその要因を解明しようとした。また満洲国時代の日本人作家と非日本人作家の作品の比較を通して、当時の作家たちが置かれていた環境の違いや共通認識の有無を調査した。

本研究の中心課題は次の2点とした。日本人作家が著した満洲亡命ロシア人関連作品の全体的な把握と、満洲国時代に日本人作家が描いた亡命ロシア人の表象(特に女性像)の特徴、およびその通時的な変化の分析である。

分析資料の主要範囲は、満洲国時代に日本人が発表してきた文学作品(主に小説)であるが、この他、満洲国時代以前、および第2次世界大戦終了以降に日本人が著した小説や、満洲国時代に非日本人作家が著した小説、特に亡命ロシア人の文学作品にも注目した。

分析にあたっては、対象作品における亡命ロシア人の表象と作品のテーマ、そして作者の属性(民族や居住地、職業や経歴)や作品が書かれた年代に留意した。

この他、中国やオーストラリアでの現地調査(地理的な確認や関係者へのインタビュー)そして文学作品以外の文献・図像資料の分析をとおして、亡命ロシア人に対する作家たちの関心の方向性と歴史的事実との関わりを探った。

### 4. 研究成果

#### (1) ロシア人女性の表象の分析

満洲亡命ロシア人を描いた日本語文学には、しばしば「美しいロシア人女性」というステレオタイプが見られる。研究代表者はこの表象の成立過程と有効範囲を検証するべく、1920年代から1945年までに日本人作家が書いた亡命ロシア人関連作品を分析した。その結果、対象とする時代の作品では日本の大陸進出政策を反映して、取り上げられる亡命ロシア人の属性や性質、および彼らと日本人との関係性が時とともに変化していくことが分かった。

1920年代には日本在住作家が近隣に住む亡命者について記述したり、短期旅行者としての経験、あるいはまったくの想像に基づいて大陸の都市部の亡命者を描いたりする作品がほとんどであった。しかし「満洲国」建国とともに、大陸の事情に通じた満洲在住者ないし長期滞在者による作品が増加する。この流れの中で、1920年代には恋人やショーガールとして魅力的に描かれていたロシア人女性たちが、しだいに生活苦に喘ぐ者として描かれていくことになった。

一方、1930年代後半から満蒙開拓政策が本格化していく中で、農村ロシア人も文学作品の中に登場するようになる。こうした作品では、農村女性は理想的な農民、母として肯定的に描かれる傾向があったが、一方で恋愛・性愛の対象から意図的に排除される傾向（恋愛関係が成立しないか、成立しても最終的に否定される）も見られた。

この分析結果は2015年に開催された国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)世界大会において、“Representations of Russian émigré women in ‘Manchuria’ provided in Japanese novels”（報告言語はロシア語）と題して報告した。

## (2) 文学作品における「民族間結婚」と「混血」の分析

日本の植民地であった朝鮮や台湾では、1930年代に実施された皇民化運動の結果として、民族間結婚をテーマとする文学作品が多く登場した。近年こうした文学作品をとおして、当時の日本と「植民地」との関係性を問う研究が現れている。満洲における亡命ロシア人と日本人との関係を描いた作品には、民族間結婚をテーマとするものは多くないが、それでも同要素を含む作品は、1930年代から1950年代にかけて20点弱存在している。

研究代表者はこれらの作品を分析し、満洲国時代においては日口間の結婚が、植民地性を体現した日本人男性とディアスポラ女性との関係として描かれてきたこと、しかしながら1945年のソ連侵攻による突然の関係性の逆転が日本人に大きなショックを与え、過去をノスタルジックにロマン化する方向を取らせてきたことを明らかにした。

満洲国時代の日本語文学では、日本人女性とロシア人男性との結婚（ないし恋愛）を描いた作品は極めて少ない。その理由としてはまず、当時は日本人女性の作家が少なく、女性の恋愛や結婚の選択が小説の中心テーマにされにくかったことが挙げられる。だが中には、冒険小説という最大限のフィクションでありながら、女性と「混血児」の「排除の物語」を含む作品もあった。

これらの研究成果はまず、2016年9月24～25日開催のヨーロッパ日本研究協会第2回日本会議(於:神戸大学)にて、“Interethnic marriages in Japanese novels set in ‘Manchukuo’”と題して報告した。その後さらに分析を重ね、2019年開催の国際シンポジウム「非日常における女性たち」(大阪大学中之島センター)において、「小説の中のロシア系エミгранトと日本人との結婚：『満洲国』の枠組みの中で」と題して報告した。

## (3) 古儀式派教徒の表象

1950年代までの文学作品の中で古儀式派教徒が取り上げられる場合、それはもっぱら、1940年代に有名になったロマノフカ村のことであった。これに対して1990年代以降、ロシア情報の増加を反映する形で、ロマノフカ村以外の古儀式派像が日本語小説に登場するようになった。1940～1950年代の文学作品の中では、ロマノフカ村は「開拓」の文脈で語られてきたが、現代作品では古儀式派教徒の宗教性が重視されている。ただしそれは、この派に対してロシアで長年にわたって醸造されてきた偏見、すなわちオカルト色の強調である場合が多い。

この成果の一部は、2017年開催の第5回ザヴォロコ記念国際会議(ラトヴィア古儀式派研究所他主催、リガ)にて、「日本の文学作品における満洲ロシア人無司祭派古儀式派教徒の表象(20世紀中葉から現在まで)」と題して口頭発表した(報告言語はロシア語)。その後、分析対象を古儀式派全体に拡大してまとめ直し、同会議の報告集に投稿した。

## (4) コサックの表象

古儀式派の分析に続き、満洲国時代の日本語文学に描かれたコサックの表象について考察した。当時の作品にもっともよく登場するのは、ロマノフカ村とともに開拓の成功モデルと見なされていた三河地方のコサックである。それ以外のコサックが登場する作品もあるが、彼らは満洲文学でよく描かれる3タイプのロシア人、すなわち「都市の貧困層」、「裕福な農民」、あるいは「反革命の軍人」に分類される。その意味で、コサックという属性に絶対的な意味が付されていたのは、三河コサックのみであったと言える。こうした視点から、研究代表者は満洲国時代に三河コサックを描いた作品を残している2人の作家、長谷川瀧と檜山陸郎に注目し、彼らの作品を分析した。そして、作家たちが実際のコサックを知れば知るほど、彼等と日本人との距離を意識する傾向があること、またそれに従って彼らが描くコサックの表象も、戦士から農民へと移行していくことを明らかにした。

この研究成果は、2018年開催の第9回スラヴ・ユーラシア研究東アジア学会(ウラン・バートル)にて、“Russian Cossack emigrants in Hulunbuir (Trehrechie) as represented in Japanese novels during the period of ‘Manchukuo’”と題して報告した。

## (5) シンポジウムの開催

2016年7月9日に、生田美智子氏(大阪大学名誉教授)との共催で、大阪大学にて国際シンポジウム「女たちの満洲とその後」を開催した。報告者は第1部「ロシアから見た旧満洲ロシア系住民：文学・映画の中の表象」を担当し、トロント大学研究員のオリガ・バキチ氏と同志社大学のイリナ・メリニコワ教授に、それぞれ「ハルビン・ロシア系女性詩人が描いたエミгранト女性像」「文学・映画に現れた亡命ロシア人の表象」と題した報告(ロシア語)を依頼した。これにより、本研究でも比較対象としていたロシア語文学作品、映像作品における亡命口

シア人の表象の特徴の一部が明らかとなった。

シンポジウムの内容については「国際シンポジウム『女たちの満洲とその後』報告」と題して『セーヴェル』誌第 33 号に掲載した。

#### (6) 満洲亡命ロシア人に関する研究

満洲亡命ロシア人に関する研究の一環として、上記 ICCEES において「20 世紀前半の中国におけるロシア正教会と古儀式派」パネルの司会を担当した。また三河コサック自身から見たソ連侵攻と日本人との関係を明らかにするために、A. M. カイゴロドフの随筆「満洲：1945 年 8 月」を翻訳した。

その他、2016 年と 2017 年に中国とオーストラリアで現地調査を行い、当時の日本人やロシア人の居住環境や他民族との関係、および戦後ロシア人が辿った運命について調査した。それぞれの調査については他の参加者とともに報告を執筆し、『セーヴェル』誌第 33、34 号に掲載した。

#### (7) 収集した文学作品のデータベース化

本研究のもう一つの目標であった収集作品のデータベース化については、作業が遅れているが、その内容の一部（日本語）をウェブで公開し始めた（『ロシア人、ロシア系住民』が登場する日本語文学作品リスト：旧満洲ロシア系エミгранトを中心に）。その数はまだ十分ではないが、今後も収集作品の分析を深めつつ、データベースの構築を進めていく予定である。

### 5. 主な発表論文等

#### 〔雑誌論文〕(計 1 件)

Игауэ, Нахо. Литературные образы старообрядцев в художественных произведениях японских писателей (середина XX – начало XXI вв.) // Заволокинские чтения. Сборник 5. Рига (2020 年刊行予定、査読無)。

#### 〔学会発表〕(計 5 件)

伊賀上菜穂「小説の中のロシア系エミгранトと日本人との結婚：『満洲国』の枠組みの中で」国際シンポジウム「非日常における女性たち」2019 年 2 月 9 日、大阪大学中之島センター。

Igaue, Naho, Russian Cossack emigrants in Hulunbuir (Trehrechie) as represented in Japanese novels during the period of “Manchukuo”. The 9th East Asian Conference on Slavic Eurasian studies. National University of Mongolia, Ulaanbaatar, Mongolia, June 30-July 1, 2018.

Игауэ, Нахо. Литературные образы русских старообрядцев-беспоповцев Северной Маньчжурии в произведениях японских писателей (середина XX – начало XXI вв.). Пятые международные Заволокинские чтения. Латвия, г. Рига, 5-8 октября 2017. (伊賀上菜穂「日本の文学作品における満洲ロシア人無僧派古儀式派教徒の表象（20 世紀中葉から現在まで）」第 5 回ザヴォロコ記念国際会議、ラトヴィア古儀式派研究所他主催、ラトヴィア、リガ、2017 年 10 月 5~8 日)

Igaue, Naho, Interethnic marriages in Japanese novels set in “Manchukuo”: Relationship between Russian migrants and Asian people provided in Japanese novels”, Ordinary Women in extraordinary times (panel, in Japanese and English), The 2nd EAJIS (European Association for Japanese studies) Japan conference, Faculty of letters, Kobe University, Japan, 24th Sep., 2016.

Igaue, Naho, “Representations of Russian émigré women in ‘Manchuria’ provided in Japanese novels”, Women of Manchuria: The case of Russian émigrés” (panel, in Russian), The 9th World Congress of ICCEES, Makuhari, Japan, 3rd-8th Aug., 2015.

#### 〔図書〕(計 1 件)

生田美智子編『女たちの満洲：多民族空間を生きて』阪大リーブル 50、大阪大学出版会、2015 年、322p. (伊賀上菜穂「小説表象としての農村ロシア人女性：日本人作家の眼を通して」pp. 159-183)

#### 〔その他〕

##### < ホームページ等 >

伊賀上菜穂「『ロシア人、ロシア系住民』が登場する日本語文学作品リスト：旧満洲ロシア系エミгранトを中心に」『伊賀上菜穂ホームページ』  
([http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~igaue/Japanese\\_literature.html](http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~igaue/Japanese_literature.html))

##### < その他の論文・記事 >

生田美智子、阪本秀昭、伊賀上菜穂「2017年オーストラリア調査報告」『セーヴェル』第34号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2018年、pp. 200-217(執筆担当は pp. 203-207, 209-214)。

伊賀上菜穂「国際シンポジウム『女たちの満洲とその後』報告：第1部『ロシアから見た旧満洲ロシア系住民：文学・映画の中の表象を中心に』」『セーヴェル』第33号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2017年、pp. 215-221

生田美智子、塚田力、小林信介、須佐多恵、竹中浩、阪本秀昭、伊賀上菜穂、中嶋毅、三浦清美「『満洲・内モンゴル』調査旅行記」『セーヴェル』第33号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2017年、pp. 170-203(執筆担当は「三河地方(下護林・上護林・恩和)」(pp. 192-196))。

A. M. カイゴロドフ著、伊賀上菜穂訳・解説「満洲：1945年8月(下)」『セーヴェル』第33号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2017年、pp. 126-135。

A. M. カイゴロドフ著、伊賀上菜穂訳・解説「満洲：1945年8月(上)」『セーヴェル』第32号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2016年、pp. 63-71。

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。